

思ひ草

第37号

令和4(2022)年1月28日 発行

コロナ禍の教育保育現場に学ぶ

子ども支援学科教授 ^{のもと} 野本 ^{しげお} 茂夫



コロナ禍という言葉がすっかり定着し、新型コロナウイルスとの共存生活が続く中で新しい年を迎えた。コロナ感染症がこれほど長期間の流行になるとは想像していなかった。常時マスクをする生活が日常になり、季節の匂いや場所の臭い、草花の香りも忘れて暮らしている。

教育保育の現場では、先生の顔を半分しか知らない子ども達が増えている。幼稚園ではそんな子ども達が卒園し、就学する時期を迎えようとしている。コロナ禍が長引くことで子どもの育ちへの影響も顕在化してくることが心配される。

その一方で、コロナ禍が始まった緊急事態宣言下になった頃に新しい発見があった。以前は子どもの姿が消えていた地域の公園や空き地で遊ぶ子ども集団や親子連れを数多く目にするようになった。一時的なことであったが、地域を生活の場にする子どもの存在が復活してきたように思えた。

保育者や教師の生活への影響もあった。インターネット

を活用した新しい教育方法が急ピッチで取り入れられ、皆その対応に追われた。ところが家庭の協力を得て機器も教材もそろえ、いざ実施してみると発信する学校や受信者側のネット環境に格差がありそこがネックになっているという事態も起きた。また、ネット上での仕事が可能になったことで、時間と場所を選ばない仕事スタイルは、保育者に新たな生活・教育スタイルへの適応を迫っている。

教育保育現場では、新たな課題、テーマがコロナ禍で数多く生まれてきている。教室やスクリーンの前に座して見えてこない実践の場でこそ気づき学べる問題がある。コロナ禍の教育保育実習やインターンシップは現場の負担が大きい。その困難を越えて学びの場が提供されることに感謝したい。教育保育の現場は、常に今日の前で起きている問題や課題に取り組むことが課される。その場で最善を尽くすことを学べる機会がコロナ禍だからこそ必要である。

“人間開発”…その理念を学生と教員が二人三脚で明らかにしていこう!

初等教育学科教授 ^{やすの} 安野 ^{いさお} 功



いま、私たち教員の間で、人間開発学部の今後のあり方について議論が沸き起っている。学部新設から10年以上が経過し、学部を取り巻く状況が大きく変わってきたからであろう。人間開発学部はこれからどう変わらなければならないのか。自分なりに思索を巡らせていた矢先、卒業生から予期せぬラインが届いた。近日放送されるNHK「首都圏ネットワーク」でKさんの授業実践(体育の跳び箱)が紹介されるというのである。彼はゼミ長を務めた健康体育学部の卒業生。私が部長を務める硬式テニス部のOB会で、杉並区の小学校で体育の研究に力を入れているという近況報告を受けてはいたが、彼の授業実践が全国放送されるという知らせに正直驚いた。

胸躍らせながら番組録画のスイッチを入れた。するとそこには、ペアを組んで互いの試技をタブレットで撮影し、それを見せ合いアドバイスを交換し合う子どもと跳び箱の学習で子どもが主体的・対話的に学び合うように導くため

のタブレットの効果的活用という授業の意図を述べているKさんの姿が映し出されていた。Kさんと言えば、テニス部での経験を活かして地域の子どもの軟式テニスを指導しているとも話していたな。卒業生からの予期せぬラインと言えば、第1期ゼミ長Sさんから千葉市の社会科研究校への異動希望が叶い研究部で社会科研究を推進しているが、その翌年安野ゼミの2つ下の後輩が異動して来て、一緒に社会科の研究を行っているというこれまた驚きの知らせを頂いたこともある。

思い起こせば、SさんやKさんなど本学部を卒業した学生の皆さんと「人間開発とは何か」を熱く語り合い、「子弟が二人三脚でそれを明らかにし、何らかの形にしていこう」と誓い合ったよな、あの頃は。ラインで卒業生の近況報告を受ける度に、『人間開発学部創設期の熱い想いを忘れてはいけない!』と自分に言い聞かせている。

教育実習

教育実習で学びとって欲しいこと

健康体育学科助教 小林 唯^{こばやし ゆい}



令和3年度の前期は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、関東地方では常に緊急事態宣言、もしくはまん延防止等重点措置が発令されている状態でした。通常、前期に行われることの多い教育実習は、軒並み実習延期が相次ぐこととなりました。しかしながら、その様な緊急事態にも拘わらず、多くの実習校が後期に日程をずらして教育実習生を受け入れて下さったことに、感謝しかありません。

教職を目指す学生にとって、教育実習は尊い機会です。教師としての振る舞いや学級づくりなど、実際に教育現場に身を置くことで、気づき、学ぶことが多くあります。学級を運営する教師には、児童・生徒の個性を尊重した学級づくりが求められます。教育実習では、現場の先生方がどのように個性を認め、学級を導き経営しているのか、声のかけ方や接し方をよく観察して欲しいと思います。年度初めに登校が制限された学校の先生からは、今年度は学級づくりに特に注力したと伺いました。児童・生徒との人間関係の築き方、学級づくりや学級経営については、教育現場でないと経験できないことですので、積極的に学んでほしいと思っております。

また、今年度は密を避けるために、オンライン授業の導入や分散登校を実施する学校も多く、通常の学級とは異なった状況にありました。教育現場では登校や体験活動の機会が制限された中でも、児童・生徒の学びを止めない工夫がなされ、その様子を間近に感じる事ができたことは、実習を行った学生たちにとって貴重な経験であったと思います。経験と知識、技術に基づいた対応力を教育実習先の先生方から学んでほしいと思います。さらに、今後もより積極的なICTの活用や習熟度別クラスの設定など授業形態はより多様化することでしょう。自身のスキルを高めて対応する能力も身につけてほしいと思います。

大学での確かな学びで教師としての資質を養い、知識と技術を習得できるよう、教員としてサポートしていきたいと強く思います。

学びの連続だった教育実習

健康体育学科 3年 高林 幸汰^{たかばやし こうた}

私は母校である静岡県の高校で教育実習をさせていただきました。実習中は毎日が充実していて4週間があっという間に過ぎました。実際に学校という一つの組織の中で実習を行ってみて様々なことを学びました。

はじめに、教師は人間関係のプロでなければならないということです。生徒との関わりはもちろん、管理職など他の先生方、保護者、地域の方々など様々な人との関わりがあるのが教師です。特に、コミュニケーションを取り合い、生徒が安心して過ごせる学校にするために尽力している先生方がとても印象的でした。

次に、学び続けることが大切であるということです。指導教官の先生にかけていただいた「授業に正解はないよ」という言葉が印象に残りました。10人の教師がいれば10通りの教え方があるように授業に正解はありません。正解がないからこそ、現状の自分に満足することなく常に学び続ける必要があります。実際に、何十年も教師という仕事を全うしている先生方でさえ、とても多くの時間を教材研究に費やし、授業後は必ず振り返りをしていました。

最後に強い覚悟と責任を持つ必要があるということです。教師という仕事は生徒の人生を左右するといっても過言ではありません。実際に私が教師という仕事に魅力を感じたのは、ある先生がきっかけです。この先生に出会わなければ、教師を目指すことや教育実習に行くことは無かったかも知れません。また、生徒は指導する立場である教師のことを常に見ています。身の回りが綺麗ではない教員が、生徒に整理整頓をしると言っても説得力はありません。生徒の前に立ち指導をするからには、自分の言動に責任を持つ必要があります。

私は4週間の教育実習を終えて、教師になりたいという気持ちが更になりました。教育実習で教えていただいたことをこれからの生活に活かしていきます。そして、「愛情と情熱を持ち、専門性と指導力を高め、学び続ける教師」になるためにこれからも日々精進し、成長していきます。

教師塾 ～実践的な指導力や柔軟な対応力を学ぶ～

試行錯誤の1年間 (東京教師養成塾より)

初等教育学科 4年 ^{すずき もえ}鈴木 萌

私は、実践的な指導力を身に付け、児童理解を深めることを目的とし、東京教師養成塾に入塾しました。

東京教師養成塾での特別教育実習は、12月から9月までの10か月間です。そのため、卒業式や入学式を教師の一員として参列したり、式典の事前準備や後片付けといった仕事を経験したりすることができました。また、40時間以上の授業実践、月1度の授業研究をします。児童が意欲的に学習する姿を見たとき、教師としての喜びを感じました。授業研究では、指導教員の先生に加え、管理職の先生方、大学の教授、養成塾の教授から、様々な視点で助言をいただくことができます。授業実践をするたびに改善点が見つかるため、非常に多くの学びがありました。特別教育実習の他には、毎月の講座や塾生同士の授業参観、オンライン英会話などがあります。講座では、同じ夢をもつ仲間と協議をすることで新たな考えを知り、視野を広げることができました。

東京教師養成塾を通して、試行錯誤することの楽しさを感じました。この経験を生かし、これからも挑戦し続けていきます。

先生ゼロ年生 (埼玉教員セミナーより)

初等教育学科 4年 ^{さとう ありさ}佐藤 有紗

「子どものことを第一に考えられる教師になりたい」という気持ちとやる気だけを頼りにセミナーを受験してから1年が経過する。セミナーでは①学校体験実習②講演講義演習の2つの活動があった。学校体験実習では、週に1度、子どもと関わる機会があった。授業をやらせていただくこともあったが、失敗の連続であった。しかし、担当の先生は、私が考えた授業案を壊さないかつ子どもに合う指導計画のアドバイスを細かくしてくださった。私の知らない児童の一面を教えてくださいのおかげで、月日を追うごとに、子ども達からも「次、佐藤先生の授業なの！嬉しい！」と言われるようになった。このことから、授業に一番影響するものは「児童理解」であるということを知った。実習だけでは足りない知識を②の講演講義演習から学び、①の学校体験実習で実践するという活動の繰り返しを9ヶ月間行った。学んだことをすぐ実践できる場を設けられている環境の中、同じ夢を志す50人の仲間と学んだこの日々を忘れず、来年からは教壇に立ち「子ども達のために」を合言葉に、全力を尽くしていく決意である。

私を変えた東京教師養成塾での学び

(東京教師養成塾より) 初等教育学科 4年 ^{しんかわ ももさ}新川 萌紗

教師になることがずっと夢だった私は、豊かな人間性と実践的な指導力を兼ね備え、即戦力となる教師になるために、東京教師養成塾へ入塾することを決意した。1年間の養成塾での活動から学んだことを振り返っていく。

まず、教科等指導力養成講座では、教科等の専門性や指導技術の向上及び学級経営における実践的な指導力等を身に付けるために必要なことを学んだ。次に、班別協議では、実習で学んだ指導方法や、授業実践での気づきなどを塾生同士で共有し合った。発達段階によって変わる指導方法や各教科における様々な工夫を学んだ。そして、切磋琢磨し合える大切な仲間ができた。次に、特別教育実習では、授業参観や実践を重ねていくにつれて、実現したい理想の授業や教師像が明確になった。また、長期間継続して児童と関わることで、児童理解も深めることができた。

私は、養成塾での経験を通して、絶対に理想の教師になるという強い覚悟を決めることができた。この覚悟をもち続けることで、この先に待ち受けるどんな困難にも立ち向かっていきたい。

アイ・カレッジでの学びと出会い

(よこはま教師塾アイ・カレッジより) 初等教育学科 4年 ^{うえき せいま}植木 生真

私は、大学3年生の10月から半年間、「よこはま教師塾アイ・カレッジ」に参加しました。様々な講座を通して横浜の教育や授業づくり、社会人としてのマナーなどよりよい教師になるために大切なことを多く学ぶことができました。講座では、自分の課題を把握するとともに「横浜の教員としてどのように考え、実践するのか」という視点で話し合いや活動を行い、より現場をイメージして教師の資質・能力を高めることができました。

また、同じ志や夢をもつ仲間や尊敬できる教官と出会い、多くのつながりが生まれました。自分の本音を出して塾生の仲間たちと熱く語り合ったり、教官から授業の技を教わったりして、毎回新たな気づきが得られました。塾生の仲間や教官とのつながりは私にとって財産であり、これからも大切にしていきたいと思っています。

「よこはま教師塾アイ・カレッジ」で得た多くの学びや人とのつながりを胸に、自信を持って4月からの教員生活をスタートさせ、よりよい教師を目指していきます。

教育ボランティア

ボランティア活動から多くの学びを得て

初等教育学科 2年 斉藤 由衣 さいとう ゆい

私はボランティア活動を通し、児童一人一人に寄り添いながら学びを作ることや、想定外の事が起こった場合に冷静かつ臨機応変な対応をすることの重要性を学びました。

ボランティア活動を始めた当初は目の前で起こる出来事に対して慌てたり、児童たちとの関わり方においても、寄り添いきれず、結果的に児童たちの気持ちを下げってしまうような声掛けをしてしまったりと、上手くいかないことが多く、日々悩むばかりでした。しかし、実際に様々なことが起こる中で先生方の対応から学び、「〇〇なアプローチをしてみよう」「これは上手くいかなかったから変えてみよう」と自分自身で考え、行動に移すことで少しずつ学びを深めていくことができました。

活動を通して教育現場を知り、貴重な経験をさせていただくことで自身の目指す教師像も不明瞭だったものが、だんだんと形成されていく実感もありました。これからも主体的に学び活動することを意識し、一つでも多く経験が積めるように取り組んでいきたいと思えます。

経験と学びを結びつける

子ども支援学科 4年 片岡 梨 かたおか りん

私は、大学1年生の2.3月に墨田区の幼稚園で介助員を週5日、4年生の4月から7月まで港区の幼稚園でスクールボランティアを、9月からは会計年度任用職員としてアルバイトを週1日しています。支援が必要とする幼児に寄り添うこともあれば、職員室で教材準備をすることもあります。

介助員として働かせていただく前は、試験前に重要な言葉だけを覚えたり、内容を詰め込んですぐに忘れてしまったりしていました。しかし、実際に幼児と関わることで、幼児の姿だけでなく環境構成等の教師の援助、行事への取り組み、教師間の連携など公立幼稚園がどのような教育を行なっているのかについて学ぶことができました。このような幼稚園で行われている教育を自分の目で見る経験を通して、大学の講義の内容と現場での学びを結びつけることができるようになりました。また、保育者としてどのような保育・教育を行なっていきたいか、どのような保育者になりたいかなど、自分自身の将来を真剣に考えるきっかけになりました。

未来塾

開講講座は「1講座」、延べ受講者数は「158名」でした

今年度の「未来(みらい)塾」の実施状況は以下の通りです。

講座名：子ども支援学研究会

担当：石川清明教授、野本茂夫教授、夏秋英房教授

開講回数：20回

登録者数：1年から4年生まで11名

延べ参加者数：158名

活動内容：例会は月2～3回のペースで読書会を開いています。精読するというより本の内容をもとに感想



や意見などを学生と教員が自由に話し合います。今年度は、滝川一廣(2017)『子どものための精神医学』を読んでいます。そのほかの活動としては、学外の園や展示会・史跡などを視察したり、共育フェスティバルで幼児向けの企画を毎回出展したりしています。今年は「みてさわってやってみよう！」というテーマで、子ども達が触感を楽しみ、部屋中に自由に絵を描ける空間をつくってみました。

